

僕のエクストリーム・ エイド

どぐう

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

? コンピューターウイルスが人体に感染するように進化して生まれた、バグスターウイルス。人類を脅かすそれは、「仮面ライダー」やドクターたちの奮闘によって根絶された。

? しかし、時が経つにつれて、ウイルスの存在や戦いの記録は失われてしまう。もはや、仮面ライダーを知る者は誰もいなくなった。

? ある日、聖都大学附属病院の研修医である緑谷出久は、ひよんなことから「仮面ライダーエグゼイド」に変身してしまう。

○年齢操作でデクが24歳。

○エグゼイド本編が終了して、何十年後かにヒロアカ時間軸になったという自分設定。

○永夢とか飛彩は出ないけど、檀黎斗とポップーは出る。

目次

	ヒーローは遅れてやってくる	—	1
	二律背反エントロピー (1)	—	17
	二律背反エントロピー (2)	—	27
	誰も神を信じやしない	—	45
58	B O O M!×2・シューティング (1)		
70	B O O M!×2・シューティング (2)		

ヒーローは遅れてやってくる

? 光が一片も差し込まない部屋で、モニターの人工的な光源だけが室内を照らしていた。キーボードに一人の男が指を打ち付ける音だけが、ただ響く。

男は、机の中で窮屈そうに押し込められた長い足を組み替えて、こう呟いた。

「一時はどうなることと思ったが……。やはり、私の才能は世界の運命を決定付ける」

? そう言いながら、男は机の上に無造作に置かれていた、手のひら大の何かを手にとった。それは、最近大きなシェアを誇るゲーム会社の家庭用ゲームソフトと同型だった。だが、黒いだけでタイトルも何も書かれてはいない。彼はゲームソフトもどきを暫く手の中で弄んでいたが、ふと思いついたようにその手を止めた。そして、引き出しからポップにデフォルメされている、これまたゲーム機らしきものを取り出した。

「第一のデータ収集は完了した……」男はそこで口を斜めにした。「ようやくゲームを始めることができるな」

? ゲームソフトがゲーム機に挿し込まれた。何も起こらなかったが、男の表情が変化することはない。そのまま黙ってソフトを抜き取る。

? その瞬間、驚くべきことが起こった。黒かったそれは引き抜かれた瞬間、鮮やかな

緑色に変化したのだ。それだけではない、コミカルなキャラクターがデザインされたシールも貼られている。理屈では考えられない事象だ。

「完成したッ！ これぞ現時点での最高傑作だア！」

？舌舐めずりをしながら、男はゲームソフトの側面部分に付いているボタンを押した。軽快な音楽とともに、ソフト名が高らかに鳴り響く。

？それを聞いて、嬉しそうに男は身を仰け反らせた。頭からひっくり返って、椅子から転げ落ちていたが、全く気にした様子はない。緑色のソフトを掲げたまま、彼はゲラゲラと笑い続ける。

「私は神だア！ 刮目せよ、モルモット共オ！ 創造主の描いた理想世界は、既に！ すぐそこだアアアア！ ブウハハハハハハア……！」

？彼の見ている未来がどのようなものは、まだ誰も知らない。人々は迫り来る陰謀に気づかぬまま、生活が続けているのだ。



？緑谷出久は聖都大学附属病院の研修医だ。現在は小児科で研修をしていて、日々忙

しいながらも充実した毎日を送っている。

「あ、緑谷！ ちょっといいか？」

「ハイ！ すぐ行きます！」 遠くの方から出久を呼び止める先輩医師の声に彼は、”瞬間移動”した。「すみません、何かありましたか？」

「いや、大したことじゃなくて。ただ、今日のカンファが明日に延期になったって伝えただけで」彼は少し申し訳なさそうな顔で言う。

「いつ、いえ！ 伝えてくださって助かりました！ ありがとうございます！」

「そうか。……それにしても、便利そうだなあ。緑谷の”個性”は」

？ おだてでもない純粋な褒め言葉に出久は、照れくさそうに頭を掻いた。

？ 中学から高校へかけての一時期、出久は事故で昏睡状態に陥っていた。しかし、奇跡的に彼は意識を取りもどした。それだけでも驚く事態だが、奇跡はそれだけでは無かったのだ。目を覚ました出久には、”自身を任意の座標に移動させる個性”が発現したのである。端的にワープと名付けられたそれを、出久よりも引子の方が喜んだ。彼女は今までずっと、息子が無個性に産んでしまったことに対し負い目を感じていたからだ。

？ 逆に出久は現状を受け入れることが出来なかった。確かに個性を得たことは素直に嬉しい。とはいえ、目が覚めたら急に雄英の受験資格を失っていたことは、彼に少な

くない心のダメージを与えていた。

雄英高校のヒーロー科は毎年倍率300倍を優に超えることで有名だ。そのため、受験のチャンスは中学3年生の一回だけと規定されている。規定は厳しく、諸事情も考慮されないのだ。もちろん、雄英以外のヒーロー科はそこまで厳格ではない。編入制度のある高校にすぐ入れれば、ヒーロー科に入ることも不可能ではなかっただろう。だが、すっかり意気消沈した出久は、どうすればいいのか分からなくなってしまったのだ。

？ 気力の無くなった出久を救ったのは、当時研修中だったとあるドクターだった。

——患者の笑顔を取り戻す為に戦うドクターも、誰かの為のヒーローだ。

？ その言葉は出久の運命を変えた。彼はヒーローにはなれなかったが、ヒーローに限りなく近い夢を得ることができたのだ。

「でも、ものすごく使いやすい訳じゃないですよ。自分以外の物だと身につけてないとダメだし……」

「いやいや、一分一秒でも早く持つてこれるじゃん。AEDとか。俺なんか治癒系だけで、小さい傷しか治せないしなあ。なんか微妙で」

「そんなことないですよー」出久は思わず大きな声を出してしまう。「脳梗塞になって抗凝固薬を服用してる人とかは、先輩がいたら絶対助かります。他にも色々……」

？ 鼻息荒く語ろうとする出久を、先輩医師は押し留める。こういうことは日常茶飯事

で、語り始めた出久は暴走機関車の如く止まらなくなることをよく知っているのだ。

「わかった。ようやくわかったけど、俺は今から診察なんだ。その話はまた今度ゆっくり聞いてやる」彼は出久の肩をポンツと軽く叩いて、去っていった。

？ 出久はすっかりへこんでしまった。いつも、ついつい相手を顧みずに話してしまう。直そうと心掛けてはいるのだが、その時になると頭から誓いはすつぽ抜けてしまうのだ。そして、自分の言動を思い出して、後悔をする。毎回その繰り返しで、もちろん今日も変わりはない。

「……ちよつと、気分変えよ」

？ とりあえず自己嫌悪のループから抜け出すべく、出久は外の空気を吸いに行くことにした。病院の周りは緑に囲まれている。自然豊かなここを、病院近くに住む老人などが朝の散歩コースに組み込むほどだ。しかし、今はお昼頃ということもあり、人は疎らだった。ぼんやりと歩くうちに、彼は一人の少年の存在に気がついた。

「あれ？ あの子、パジャマ着てる……？」

？ 中学生や高校生なら、外出許可を得たのだろうと思えたかもしれない。だが、その少年はどう頑張っても4歳くらいにしか見えない。そんな子供が親の同伴も無く、外を歩いているのはおかしいのだ。向こうも出久の視線に気づいたのか、目をこちらに向けた。そして、出久を見るやいなや、踵を返して逃げ出すとする。

?そこで、ようやく彼にも得心がいった。——これは、脱走なのだ。

「ちよつと! ちよつと、待つて!!!」

?慌てて出久は、少年を追った。大人と子供ではリーチがまるで違う。ワープを使わずとも、すぐに追いつくことができた。手を掴んでも、少年は必死に振りほどこうとする。仕方なく、出久は彼を羽交い締めにした。

「ほら、病院に帰ろう? きつと、先生たちも心配してる」

「やだ! 離して!」

?当たり前だが、説得にも耳を貸してもらえない。人間を抱えたままワープはできないし、暴れるので歩くのも覚束ない。どうしたものかと考えていると、遠くから走ってくる、アタッシューケースを手にしたスーツ姿の女性と目が合った。女性は出久たちの目の前で足を止めた。

「もしかして、親御さんですか?」

「いえ」出久の問いに、女性は首を横に振った。「電腦救命センターCR所属の飯野明日那です」

?女性は名刺を差し出したが、出久の両手が塞がっているのを見て、その手を引っ込めた。

「電腦救命センター……?」聞いたことのない部署の名に、出久は首をかしげる。「何処

ですか、それ」

「詳しくはお答えできません」彼女の返事はにべもない。「とにかく、ソウタくんを見つけてくれてありがとうございます。……ソウタくん、帰ろう？ 治療をしないと、もっと病気がひどくなるよ？」

「ボク、なにも悪いところないもん！ 勝手に先生たちがビョーキって言ってるだけじゃん！ 薬も何も出さないくせに！」

？少年——ソウタが叫んだ瞬間、彼の身体にノイズが走った。反射的に、出久は飛び退く。

「ウワアアアアアア！」

？悲鳴とともに、ソウタの体がオレンジ色の物体に変化してゆく。巨大なミートボールが連結したような見た目のそれは、緩慢な動きながらも攻撃的で近くの木を何本かへし折った。

「えっ！ 個性の発現!? 異形型?」

「違う。発症したの……」

「発症?」

「人類は新型ウイルスに脅かされているの。ゲームから生まれたコンピューターウイルスが人類に直接感染するように進化した。それが、バグスターウイルス。ウイルスは増

殖を続け、最終的に患者の体はバグスターに乗っ取られる……」

「？ 出久は頭がぐちゃぐちゃになりそうだった。だが、このままでは患者が危険ということだけはかろうじて理解できた。」

「何とかならないんですか！」

「……助かる可能性はある」

「？ 彼女はアタッシューケースを開けた。そこに入っていたのは、黄緑と蛍光ピンクの派手なベルト。そして、ゲームソフトだった。」

「ゲームドライブとライターガシヤット……。これを使って、ソウタくとバグスターを分離するオペをする」

「それでオペが出来るって言うんですか!?!?」

「仮面ライダーに変身すればね。でも、殆どの人間はドライブに適合しない……。つて、ちよつと君！」

「？ 出久はドライブとガシヤットを手に取り、バグスターの方へと走り出す。」

「返して！ それは素人が扱えるゲームじゃない！」

「？ 明日那の声は出久に届かなかつた。彼はドライブを腰に巻き、ガシヤット横のボタンを押した。」

『マイティアクションX!!!』

? ソフト名が読み上げられ、周りの景色が一度ピクセル化して再構成される。茶色のブロックがいくつか空間に生み出された。

「ゲームエリアが広がった! ……まさか、適合者?!」

? 彼がドライバーを扱えるのなら……。彼女は出久にオペを託すことに決めた。次に何をすべきか分からず、戸惑っている出久に駆け寄る。

「貸して!」明日那は出久の手からガシヤットを奪い取り、ドライバーに差し込んだ。

『ガシヤット!』

『レッツ・ゲーム! メツチャ・ゲーム!? ムツチャ・ゲーム!? ワツチャ・ネーム!』

『アイムア・仮面ライダー!』

? 音楽が鳴り止んだ後、そこにいたのは二頭身のキュートなキャラクターだった。

「えっ……。えええ〜!」

? 自分が珍妙な姿に変化したことに、出久は叫ぶことしかできなかった。

「早くバグスターと患者を分離して!」

「えっ。あ、はい!」

? 自身を急かす声に、よく分からないながらも出久は走った。身体は軽く、イメージ通りに動くことが出来る。軽くジャンプするだけで何十メートルも跳躍できるし、小回りが利くので攻撃もすぐ避けられる。

？だが、中々向こうに有効なダメージを与えることが出来ない。決めあぐねているうちにバグスターの振り回す腕が出久に当たり、身体がブロックに勢いよく衝突した。ぶつかつたことで砕け散つたブロックの中から、メダルのようなものが飛び出した。

「エナジーアイテム！ 早く取って！」

？明日那の声に従い、出久はエナジーアイテムを取つた。

『高速化！』

？先程よりも早く動く出久にバグスターは認識できない。それを良いことに、攻撃を幾度も与える出久。

「これで最後だ！」

？何度も回転を掛けつつ、バグスター目がけて突進する。的が大きいので、その攻撃は外れることはない。

『PERFECT!!』

？どんどんバグスターが縮んでいき、最後には消滅した。そこには倒れ込んだ少年だけがいた。

「ソウタくん！」

？明日那がソウタの元へ駆け寄る。それに続き、出久も変身を解こうとするが、明日那によって止められる。

「まだオペは終わってない。分離しただけで、完全に倒したわけじゃないんだから」

？彼女の言葉通り、ソウタの身体から再びノイズが走る。ふと、周りを見渡せば、出久たちは異形の怪物に囲まれていた。オレンジ色の頭をした人型の怪物。殆どがシエフのような格好をしている。その中で一体だけ、凝ったデザインのものがいた。全体的に青く、シルクハットのようなものをかぶってかいる。

「マイティアクションXのボスキャラ、ソルティ。アレを倒さないと、ゲームは終わらない」

「あれが、ボスキャラ……」出久は呟いた。

？ソルティは高笑いをしながら、戦闘員を引き連れ出久に近づいてくる。

「レベル1のお前など取るに足らん。ハッハッハッ……」

「どつ、どうしよう！」助けを求めるように、明日那を見る。

「レバーを引いて、レベルアップして！」

「こつ、こう？」言われるままにレバーを引く。

『ガツチャーン！』

『レベルアップ！』

『マイティ・ジャンプ！ マイティ・キック！ マイティ・マイティ・アクションX!!』

？顔以外の全てのパーツが外れ、手足が生える。頭身も人間らしくなった。

『ガシャコンブレイカー!』

? 出久の手に打撃用武器がおさまる。デザインも相まって、おもちゃのピコピコハンマーのようだ。

「これで、殴つたらいいのかな……?」

? とりあえず、雑魚バグスターを叩いてみた。”HIT!”という文字が浮かんで、バグスターがやられていく。

「うおおおおお!」

? 勢いに任せて、何も考えず叩き尽くす。そうこうしているうちに、残るはソルティだけとなった。しかし、ソルティは雑魚バグスターよりは知能が高かった。ハンマーでの近距離攻撃を電撃で返され、出久は苦戦を強いられた。

「武器のAボタンを押して!」明日那の助言に従い、Aボタンを押す。

『ジャツキーン!』

? ハンマーからピンク色の刀身が伸び、剣に変化する。

「うわ、すごい!」

? だが、少し武器の長さが変わったくらいで、戦況が変わるものでもない。さつきよりは攻撃が当たるようになったものの、電撃のせいでやはり腰が引けてしまう。

「どうしたらいいんだろ……。あつ、そうだ!」

? 一度ソルティを放置し、出久はチョコブロックの方へと走る。剣でブロックをいくつか破壊し、メダルの柄を確認した。

「蝶ネクタイとマイクのやつは何か分からないな……。というか、絵だけじゃどれもよく分からない。あつ、もしかして。これ使えるんじゃないかな!」

? 出久は青紫色のメダルを取った。そこに描かれているのは、鼻提灯を作り眠る人のシルエツトだった。

『睡眠!』

「やった! やつぱりそうだ!」

? 睡眠のエナジーアイテムは、対象を眠らせる効果がある。ソルティにもその効果は勿論効き、ソルティは眠ってしまった。

「……えっと、必殺技ってどうするの?」

「ガシヤツトを抜いて、キメワザホルダーに挿して! それで、ボタンを押す!」

「わかった!」

『ガツシューン!』

『ガシヤツト!』

『キメワザ!』

? 右足からカラフルなエフェクトが現れる。出久は力がみなぎるのを感じた。

『マイティクリティカルストライク!』

? 眠ったままのソルティにキックが炸裂する。目が覚めたときには、もう避けることができない。

『会心の一発!』

『グワアアアアアア!』ソルティは成すすべもなく爆発してしまった。

『ゲームクリア!』



「もう、ソウタくんは大丈夫なんですか?」

「ええ。彼の体内のバグスターウィルスは死滅したから」

? 戦いの後、2人はソウタを担当医に引き渡しに行った。担当医は病気が治癒していたことに驚いていたが、『外の空気を吸ったのが良かったのかも』と言って明日那は誤魔化していた。仮面ライダーの事実を隠すことに出久は疑問を覚えたが、とりあえず何も言わないことにした。

「そうなんですか、良かった〜! それにしても、僕変身なんて初めてしました。昔はヒーローに憧れて、ヒーロー科目指したりとかしてたんですけどね……。知ってます?

オールマイト。格好いいんだよなあ……」そこまで話したところで、出久はハッと気づく。「つて、僕の話なんか興味無いですよ。なんか、すみません……」

？明日那は出久の話に適当に頷いただけだった。そして、「一緒に行ってもらいたいところがあるの」と言った。

「(トト)は……」

「電腦救命センター。通称CR。バグスターに対抗する為に作られた極秘部署よ」

「こんな場所、ウチの病院にあつたんだ……」

？エレベーターに乗り込み、連れてこられた先は地下にある部屋だった。それなりに広く、テーブルやモニターなどが備え付けられている。点滴などの医療器具などもいくつか置かれていて、その点は非常に病院らしい。だが、一つだけ異様な一角が存在した。そこにはピンク色のゲーム筐体が置かれていて、周りはぬいぐるみなどでファンシーに飾られていた。

「ゲーム？ どうしてこんなところに？」

？そう尋ねた瞬間、明日那が出久の顔近くにぐつと寄った。

「コスチュームチェンジ！」

その場で彼女はぐるぐると回転する。光と共に、音符やハートが飛び出してくる。驚いた出久は、思わず顔を手で覆う。

？光が消え、おずおずと手を顔から離す。出久の目の前で、明日那の姿が驚くほどに変化していた。薄いピンク色の髪の毛に、大きなボタンがたくさん付いたミニスカート。オーバーニーソックスとの間の太腿が眩しい。

「……ヒーローコスチューム？」

「も〜！ 違う違う！ 明日那は世を忍ぶ、仮の姿！私はポッピーポパポ！ よつろしくね〜！」

？衝撃はそれだけで終わらなかった。明日那——ポッピーポパポの身体が筐体に吸い込まれていったのだ。

「ええ〜!?」思わず筐体に身を乗り出す出久。

「やつぱり、私の目に狂いは無かった！ 君ならきつとヒーローになれる！」

？だが、出久の様子には気も留めず、彼女はとある画面を表示させる。そこには10個のゲームソフトの画像が描かれていた。背後のモニターに映り込んだポッピーポパポは、出久にこう告げた。

「ゼーンぶのゲームをクリアして、人類を救うスーパードクターになって！ 仮面ライ

ダーエグゼイド！」

「仮面ライダー……エグゼイド？」

二律背反エントロピー（1）

？何を言われているのか、最初出久には理解できなかつた。彼は口を呆けたように開けたまま、モニターの向こうで微笑むピンク髪の少女を見つめていた。

？何も言葉を返してもらえないことに痺れを切らした彼女が画面から出てくると、ようやく出久は「話す」という行動を思い出した。堰を切つたように、口から言葉が溢れる。それらは質問となつて、矢継ぎ早にポツピーポパポにぶつけられていった。

「エグゼイドつて？　まず、CRつてそもそもなに!?　あと、マイティアクションXつて今復刻版出てるやつだよな？　最近流行つてるから知ってる。でも、なんでその敵キャラが感染するの？　あと、急に格好が変わつたのは？　それから……」

「そんなにいっぱい色んなこと聞かないでよ〜！　わかなくなつちやう！　もう〜！　ピポペポパニックだよ〜!!!」

？ポツピーポパポの頭の上にヒヨコのエフェクトが現れ、小さく円を描く。キャパシテイオーバーを表しているのだろうか。

「ごっ、ごめんなさい……」

「いいよ〜！　頭上のヒヨコが消える。」というか社長、復刻版出してたんだ〜！　教え

てもらってなかったから全然知らなかった！」

「あれ……。幻夢の社長さんと知り合いなんですか？」

「知り合いも何も」そこで彼女は嬉しそうに笑みを浮かべた。「ポッピーは幻夢コーポレーションからCRに派遣されたの！ ガシャットやドライバーも幻夢製なんだよ！」

？ そう言つてポッピーピポパポは、その場でくるくると回り始めた。テンションが上がるど踊り出してしまふ。それが、彼女の癖なのである。

「ええー!? 敵やシステムがゲームモチーフなのは偶然なんだとばかり……」

「そんな偶然ある訳ないでしょ。そもそもバグスターが生まれた経緯はね——」

？ ポッピーピポパポの説明は、纏めるとこのようなものであった。

？ 幻夢コーポレーションにて開発中のゲームがある時、悪意ある何者かに盗まれた。そのゲームは「現実世界をゲームに」という開発コンセプトで、バグスターウイルスを平和利用する研究を進めていた。ウイルスは、人体に感染してしまうと感染者のストレスで増殖する。ウイルスは最終的に宿主を消滅させる形で、人間を乗っ取ってしまうのだ。これをバグスターウイルス感染症、通称ゲーム病と呼称している。

？ けれども、その欠点さえ回避できれば、バグスターは人間文明を飛躍的に進化させる可能性を秘めているのだという。だが、バグスターウイルスは既に悪用されてしまひ、何人もの犠牲者が出ている。

？その為、幻夢コーポレーションは新ゲームの開発を一時的に中止し、バグスターに對抗するシステムを開発した。それがライダーシステムである。仮面ライダーに変身するには、ウイルスへの耐性を持つていなければならない。普通であれば適合手術を受け、体内で抗体を作り出した者だけが変身できる。出久は適合手術を必要としなかった稀有な例なのだという。

？ 電脳救命センターは、幻夢コーポレーションといくつかの大手ヒーロー事務所との共同出資で作られた。聖都大附属病院は提携病院として、場所を提供しているのだ。

？ただ、バグスターへの対処は一見戦闘ではあるけれど、実際はオペという医療行為だ。ライダーがヒーローだけに偏るのもおかしいので、ドクターも加入させるべきという意見が出た。故に、ポツピーピポパポは病院に足を運んでいたのだ。ライダーの候補者を探す為に。

「——だから、元々はプロヒーローの誰かがエグゼイドに変身する予定だったの」

「プロヒーロー!？」 出久は驚きで、顎が外れそうな程に大口を開けた。「そんなところに僕が混ざるって、場違いな気がするんですけど……」

「大丈夫だって！ はい、これ。イズクのだよ」

「えっ……」

？ 手渡されたのは、聴診器。

?よく見ると、普通の聴診器とは構造が少し違っていた。チェストピースの上がコントローラーのようになっていて、レバーやボタンが付いている。

「これはね、ただの聴診器じゃないんだよ。ゲームスコープって言って、ゲーム病患者の診察に使うの。PHSにもなってるから、失くさないようにしてね。期待してるよ、ドクター!」

?肩を勢いよく叩かれ、出久は少しよろけた。ゲームスコープを握ったまま、不安そうに俯いて――

「いや、でも……。僕、ちよつとヒーローに詳しいだけのクソオタクだし、戦闘向きの個性でもないし……。ヒーローと、かつ、肩を並べるなんて、そんなの僕に……。」弱気な発言を並べていた。

?それも当たり前である。彼の中で、ヒーローという存在は神格化されたも同然だ。“個性”という己の力のみで人々を救う……。それはあり得たかもしれないが、叶いしなかった、彼の夢だった。

「務まる訳がない……。か?」

?そんな出久に言葉が掛けられた。もちろん、ポツピーポパポではなかった。CRを隔てる扉の向こうから、1人の男が入ってきていた。まず目を引くのは、頭を中心でくつきりと分かれている赤と白の髪。そして、その特徴が霞む程の整った顔立ち。

？彼の顔に無駄なものは何も無かった。瞼と眉の間の肉や、鼻と口を繋ぐ人中線といった、人間の醜さを象徴するパーツはどれも主張をしていない。逆に、二重幅はくつきりと癖付き、長い睫毛は重力に反して上に伸びている。目と目を隔てる高い鼻も、計算され尽くしたかのような造形だ。

？だが、顔の4分の1程は肌の色が周りと異なっている。しかし、そのアンバランスさが妙な色気を醸し出していた。

？男は冷たい眼差しで出久を見ている。人間離れた美貌からの視線に射竦められ、出久は身じろぎ一つ出来なかった。

「こんな弱気な奴もCRには居るんだな。仮面ライダーというのはどうやら、ヒーローより間口が広いみたいだ」

？何の感情も乗っていない声だった。侮蔑でも憐憫でもない。淡々と事実を述べたのだ、と言わんばかりの様子だ。

？そんなこと言わなくても、と諫めようとするポツピーピポパを出久は押し留める。何とか気を奮い立たせて、男を真正面から見た。

「……そりゃあ、当たり前です。ヒーローと僕が同じレベルな訳が無いんですから」意識しないと声が細くなりそうだった。「だけど……」

？出久の脳裏に、あの時の医師の言葉が蘇る。

「ゲーム病患者の消滅の事実を、知ってて放っておくことなんて僕にはできません。だから、誰に何と言われようと、僕は変身します。……エグゼイドに」

？その決意表明に、男は少しだけ目を見開いた。けれども、出久へ言葉を返すことはなく、ポツピーピポパポにゲームスコープを貫いて来たという旨だけを述べた。そして、ゲームスコープを受け取ると、何も言わずにCRを出ていってしまった。



「あー！ やってしまっただけ！」出久は頭を抱えてしゃがみ込んでいた。「あんな啖呵切つちやうなんて……。僕どうかしてた……。これから僕どうしたらいいんだろ……。ああ、どうしようかなブツブツ……」

「顔！ イズク、なんか顔が変になってるよお！」

？ネガティブループに陥った出久の顔を見て、ポツピーピポパポは少し怯えていた。それでも、とりあえず彼女は出久に椅子へ座るように勧めた。よろよろと出久は立ち上がる。

？ポツピーピポパポは冷蔵庫の方へ向かったかと思うと、ジュースの入った2Lポト

ルと紙コップを手に戻ってきた。

「まあ、でも。よく言ったと私は思うよ。あそこで何も言わなかったら、男じゃないよ。——はい、どうぞ」そう慰めつつ、紙コップを出久の前に置いた。

「ありがとう……」一息にジュースを飲み干すと、少し落ち着いたようだ。「ところで、さっきの人って、ヒーロー……だよな？」

「うん。イズクと同じ、仮面ライダーの変身者。轟焦凍って人。CRのセンター長の息子らしいってのは知ってるんだけど……」

「セツ、センターちょう……!?!」思わず、声がひっくり返る。

「まあ。センター長って言ったって、No. 1ヒーローだとか何とかが名前貸してるだけけどね」

「？出久は目を白黒させながら、現在のヒーロー勢力図を思い出していた。現在の一位は確か——」

「フレイムヒーロー・エンデヴァー……」

「？炎を操る個性を持つヒーローだ。炎系統の個性としては地上最強と言われている。」

「あー、それぞれ！ そんな人」

「でも、エンデヴァー事務所にあんなツートンカラーのヒーロー居たかな……。僕デビューしている人は一応活躍をチェックしている筈だけど……」

轟焦凍だったのだ。

？彼は圧倒的な氷の力で、勝己を下した。勝己の個性である”爆破”は有用だが、汗が出なければならぬという欠点が存在する。絶対零度と化したフィールドは彼の汗腺と相性が悪すぎたのだ。その一幕を見た時、出久は酷く驚いた。

？出久にとって、爆豪勝己の存在は”強さ”の象徴で、最初のあこがれだ。毎日のように苛められ、聞くに耐えない言葉を投げつけられても、そのことだけはずっと変わらなかった。

？そんな彼が、負けたのだ。

？爆豪勝己も敗北するという事実は、出久にパラダイムシフトを体験させたのだ。だからこそ、医者という選択肢を提示された時に、すんなりと受け入れることができたのかもしれない。

「——そのあとはあんまり見かけなかったし、すっかり忘れてたけど……。ヒーローになつてたんだなあ」出久はしみじみと呟いた。

「ふーん。でも、なんでだろうね。No. 1ヒーローの息子って話題になりそうなのに」「うん……。まあ、そこには僕なんかには想像もつかないくらい理由があるかもしれないです」

「確かに」ポッピーピポパポは頷いた。「それに、イズクはショウトのことよりも考えた

方が良いことがあるよ」

「えっ、何を……っ？」

「変身ポーズ！」

？椅子から勢いよく立ち上がり、彼女はクルリとターンを決めた。そして、人差し指を出久の顔に突き出す。

「気合いを入れやすいのもあるし、ガシヤットを入れるタイミングを計りやすいの。だから、カッコいいの考えなよ！——あと、キャラ選択画面も忘れちゃダメだよ」

「わっ、わかった……。考えてみます」がくがくと首を縦に振る。「なんか、書くもの貰えますか？」

？電話台の上に置かれていたメモ帳とボールペンを渡されると、出久は細かい文字でアイデアを書き始めた。時折、小声でブツブツと何事かを呟いているのが聞こえる。

？その異様な様子を見て、ポッピーピポパポは唇の端を引きつらせる。少しずつ距離を取り、そっとゲーム筐体の中へと戻っていった。

二律背反エントロピー（2）

？仮面ライダーエグゼイドとしてバグスターウィルスと戦うことを決意した出久だったが、しばらくの間は平和な日々を過ごしていた。

？変化したことと言えば、家に帰らずCRに泊まり込むようになったくらいである。出久は、病院近くのワンルームマンションで一人暮らしをしており、専ら食事はコンビニ飯なのでどこで食べようが大差無い。

？問題点といえば、CRの病室で眠る訳にはいかなないので寝袋で眠ることになる。そのことで、多少生活レベルが下がることくらいだ。とはいえ、整理されないまま放置されているヒーロ雑誌やグッズがベッドの上にまで侵略しているので、人間らしい生活は保証されてはいない——これは出久が自堕落なのは無く、多忙ゆえに片付け切れていないだけなのだ。

？仮野明日那もといポップピーポパポとの関係も良好だった。彼女はバグスターではあるが、音楽ゲームのキャラクターであった為に人間に好意的だ——だからこそ、CRのナビゲーターキャラとして設定されているのである。

？女性経験どころか、女の子と手を繋いだこともない出久でも、人間特有の嫌なところ

ろがないバグスターのポツピーピポパポとは気安く付き合えた。もちろん、彼女だって皮肉くらいは言うし、出久の奇行に冷ややかな視線を向けたりはする。けれども、いつまでもそれを引き摺ったりはしない。パソコンのウィンドウを閉じて、新しいタブを開くように感情を切り替えることができるからだ。

? ある日の昼ごろ。

? CRに急患が搬送されてきたと、ポツピーピポパポから連絡が来た。出久は齧っていたランチパックをお茶で流し込んで、CRへと急いだ。

? 医局のドアを開けると、既に出久以外のメンバーは揃っていた。

「やつと来た。出久、ちょっと遅いよ」

? ナース服にコスチュームチェンジしたポツピーピポパポ——明日那がそう言う横で、焦凍がカルテを見ながらコーヒーを飲んでいた。

? 彼と顔を合わせるの、初めて会った時以来だ。一瞬だけ、目が合う。出久はとりあえず会釈しておいた。

「患者は君島結花ちゃん、14才。自宅で倒れて緊急搬送されてきたんだけど……。とりあえず、病室に行こうか」明日那はそう言った。

? CRの医局と病室は螺旋階段で繋がっている。階段を降りて、3人は病室へと移動

した。

？病室内は物が少ない。ベッドと壁に沿って作られた診察用のデスク、見舞客の為の椅子くらいしか置かれおらず、殺風景だ。ゲーム病の進行を逐次確認することの出来る特殊なベッドには、毛布を掛けられた患者が横になっていた。少女は出久達を見て、体を起こそうとした。

「あつ、一人で起き上がれる？」 駆け寄った明日那が手を貸す。

？上半身を起こした結花は、崩れた髪型を少し手櫛で整える。そして、不安そうな表情で出久や焦凍、明日那の顔を見回していた。

「絶対大丈夫だからね。きっと病気は良くなるから。学校だって、すぐ行けるようになるよ」

？出久は、彼女を安心させるべく声を掛けた。憧れのヒーローであるオールマイトをイメージしたつもりだったが、結花の表情は浮かないままだった。

「あの……。わたしの病気って、すぐに治るんですか」出久の目をジッと見つめ、結花は言う。

「うん、オペをすればね」出久は頷く。

「……じゃあ。それ、しなくていいです」

「えっ……！？ どうして？」

？ 答えは帰ってこなかった。彼女の体内のバグスターが、活性化し始めたのだ。
「バグスターか」

？ 今まで無言だった焦凍が、ドライバーを腰に巻き、ガシヤットを構えた。

『タドルクエスト！』

「……変身」

『ガシヤット！』

『レッツ・ゲーム！メツチャ・ゲーム!?ムツチャ・ゲーム!?ワツチャ・ネーム!』

『アイムア・仮面ライダー！』

？ ……どれだけ格好良い人が変身しても、二頭身ではなあ——出久は何となくそんなことを思った。

？ 仮面ライダーブレイブ・レベルがバグスターユニオンに斬りかかろうとするも、それは明日那の声によって止められてしまった。

「ストゥップッ！ このまま戦ったら病院が壊れちゃうでしょ!!! ステージセレクトし
てよ！」再びコスチュームチェンジしたポッピーポッピーが叫ぶ。

「ああ、悪かった」

？ 焦凍がキメワザスロットホルダーのボタンを押すと、「ステージセレクト！」の音声と共に周りの景色が一変した。白かった床は石や岩が転がる地面へと変わり、頭上には

青い空があった。

「ここは……」

「ゲームエリア。ドライバーには仮想空間を展開する機能があるの。ほら、出久も早く変身！」

「そつ、そうだった！」

『マイティアクションX！』

？慌てて彼もガシヤットを構えた。メモ帳を3冊も消費して考えた変身ポーズだ。

「変身！」

？エグゼイド・レベル1に変身した出久は、バグスターユニオンへと向かっていった。

？しかし、出久は特に出る幕もなかった。焦凍が氷でバグスターを凍らして、動きを止めてしまっていたからだ。動かないデカブツ相手には、攻撃は一方的に通る。

？バグスターも無事分離され、出久も焦凍に加勢しようとした時だった。消滅しているバグスターユニオンの向こうから、新たな人影が現れた。その姿はまるで――

「……黒いエグゼイド？」ポッピーピポパポが呟く。

？エグゼイド・レベル2の2Pカラーとでも言うべき色合いの謎のライダーがそこに居た。手にはゲーム機の形をした武器を持っていて、銃口は出久達に向けられていた。

「誰だ！」

?返事は無かった。その代わり、謎のライダーは黄色いガシャットを鳴らす。

『シャカリキスポーツ!』

?同時に現れたビビッドカラーの自転車が変形して、肩に装着される。だが、そのまま襲いかかってくるのではなく、ただ武器で弾幕を作っただけだった。それでも、咄嗟に腕で庇ってしまう。

?煙が消えた後、そこにはもう謎のライダーもバグスターも居なかった。



「まさか、結花ちゃんがイジメにあってるとは……。そりゃあ、学校なんて行きたくないよね」

?変身解除後、CRに戻ってきたあとのことだった。

? 出久は、結花にオペを拒否する理由を尋ねていた。ゲーム病は高熱や目眩、強い体の痛みを伴う。今の彼女が辛い訳がなく、余程のことが無ければ治療を拒否しない筈だ。何か事情があるのではないかと、出久は推察していたのである。最初はいくら聞いても教えてもらえなかったが、粘り強く質問するうちに諦めたのか、彼女は話しはじめた。

「最初は自殺とかしようと思ってた。けど、病氣の方がよっぽど楽に死ぬるんじゃないかなって」

？原因はクラスでのいじめであった。彼女は、過去の出久と同様の”無個性”。最初は筆箱などを浮かされて、高い所に置かれるくらい程度の悪ふざけだった。しかし、それらは日が経つにつれてエスカレートしていく。体育の後で制服が腐食させられていたり、授業前に教科書を”透明化”で隠されたり……。そのようなことは日常茶飯事なのだという。

「学校の先生には言った？ 言えないなら、お母さんにでも……」「言える訳ない」出久の言葉は遮られた。「先生は見て見ぬ振りしてるし。それにお母さんには教えられないよ。ただでさえ、わたしをこんな産んだことを気にしてるのに。イジメられてるなんて言えない」

？その気持ちは出久にも痛い程分かった。昔の出久も言えなかったのだ。ただでさえ母親は自分を責めているのに、子供が学校で惨めな目にあっている事実など、とてもじゃないが伝えられなかった。

「……」だからこそ、何を言ってもやればいいのか分からなかった。

「ねえ、先生。わたしを助けると思ってた、このまま見殺しにしてよ。もう、十分生きてと思うんだ。頑張ったんだよ」

？穏やかな口調だが、それは結花の悲痛な叫びだった。彼女は生きることが諦めてしまっている。言う通りにした方が、結花を救えるのかもしれない。来世に期待して、死んでいく方が――

？しかし、出久は結花を見捨てることは出来なかった。彼はドクターで、ドクターに人の生死を決める権利は無いのだ。

「でも、僕は結花ちゃんに生きていてほしいって思う」

「綺麗ごとなんか言わないで！」体の何処から出ているのだというほどの怒鳴り声が病室に響く。「頑張って生きてたら個性が発現する？　する訳無いじゃん！　それとも先生がわたしのムコセイ治してくれんの!？」

「それは……」

？後天的に個性が発現することも無い訳ではない。出久がまさにそうだ。だが、それは本当に稀有な例。結花もそうであるとは限らないのだ。

「出たって。わたしは治療なんか要らない。他の先生にもそう言うてよ」

？出久は、黙って踵を返すほか無かった。

？そして今、そのことをポッピーポッピーポッパポッパに伝えていた。

「ピペポパニックだよー！」ポッピーポッピーポッパは頭を抱えて、部屋中をぐるぐる回って

いる。「ね〜！ ショウト、どうしたらいいと思う〜!?」

? 椅子に座っている焦凍を力いっぱい揺らす。ポツピー。ピポパポ。肩を揺すられながらも焦凍は無表情のままだ。その表情のまま彼はこう言い放った。

「別にオペを強行すれば良いと思う。体を切る訳じゃねえし、厳密には本人の許可は必要ない筈だ。最悪訴えられても、このまま放っておけば消滅するんだから緊急処置と言えば勝てる」

「そんな……! せつかく治つても、結花ちゃんはまた死にたいと思うだけなんですよ? そんなの、助けたって言えませんよ」

? 出久は焦凍に詰め寄る。結花の説得について皆で考えるつもりでいた出久には、到底納得できることでは無かった。

「じゃあ、何だ? このまま消滅させるって言うのか? 今言っていることはそういうことだ」

? 何も言い返せなかった。他人の細かい事情に立ち入れない以上、オペをすることぐらいしか出来ないのは分かっている。けれども、それは正しいことではない気が、出久にはしていた。

「お前がやらないって言うなら、俺一人でもやる。ヒーローは慈善事業じゃないんだ。やらなきゃいけないことをただやるしかねえ」

？焦凍は席を立ち、CRを去っていった。

「……なんかイズク、変じゃない？ そりや、患者さんの気持ちは分かってあげなきゃいけないよ。でも、オペをやめるなんてやつぱりやり過ぎだよ」

？両手を強く握ったまま立ち尽くしている出久に、ポツピーピポパポはそう言った。

「そうですよね……。だけど、他人事に思えないんです。結花ちゃんのこと」

「もしかして、イズクも昔イジメられていたの？」

「はい。しかも、おんなじ理由で」

？出久は過去の話を話しはじめた。前からポツピーピポパポになら言っても良い、と思っていたのだ。幼馴染のこと。昔の夢のこと……。時系列も内容もぐちゃぐちゃだったが、彼女は何も言わずに聴いてくれた。

「——そっか……」

「助けてあげたい。でも、それはあの時の僕に解決できなかったことで……。だから、今何をしてあげたらいいのかわからない」

「うーん。難しくくて、ポツピーにも分かんないなあ……」

？打開策も見つからず、2人は唸るくらいしかできなかった。そこに、ゲームスコープから着信音が鳴った。焦凍からの連絡で、「バグスターと遭遇した」という内容だった。

「とりあえず、バグスターを倒しちゃおうよ。後のことは、それから考えたらいいと思うな」

「……分かった。行ってくる！」

？ 迷いを断ち切った出久は、バグスターと切除すべく現場へとワープして行った。



？ 轟焦凍はアランブラバグスターに苦戦していた。

？ 恐らく、変身前なら十分圧倒出来た筈だ。しかし、「バグスターはライダーシステムでない」といふというルールのために、彼は変身を余儀なくされているのだ。

？ 変身後も一応個性を使うことはできる。だが、生身の時と同じようには扱えない。開発者の檀黎斗曰く、今のプログラムでは強力な個性を処理し切れないのだという。要するに弱体化だ。周りを凍らせるのにもタイムラグが存在するし、有効範囲も随分狭くなってしまうている。

？ 逆に、アランブラバグスターは焦凍が凍らせてくる前にワープして回避することが可能だ。バグスターは、実体はあれどデータ体なので自由に転移することができるから

である。

そして。

『シビレール！』焦凍の凍結射程よりも遠くから、魔法を撃つことができた。

「ちっ……」

？仕方なく、近接戦闘に切り替えた。ガシャコンソードを召喚し、氷の個性で強化して斬りつける。とはいえ、いくらライフを削つても回復魔法で元どおりである。

——炎を使わなければいけないのか……

？焦凍は自分の左手を見つめる。彼の個性は氷だけでは無く、”半冷半燃”。氷と炎が複合した個性なのだ。けれども、彼は戦闘で炎は使わないという誓いを立てていた。そのことが、彼に迷いを生じさせる。

？けれども、彼はいつまでも迷う必要はなかった。

？仮面ライダーエグゼイド——緑谷出久がやってきたからだった。

？変身した状態で走ってきた出久は、勢いを殺すことなくガシャコンブレイカーをアランブラに振り下ろす。流星にアランブラも不意を突かれた形になった。出久は重ねて攻撃を加えようとしたが、2対1はマズイと判断したアランブラが戦線離脱しようとする。

？しかし、出久はそれを許さなかった。

？アランブラのフード部分を掴み、彼はバグスターごとワープした。アランブラが何か喚んでいるが、気にも留めない。

？出久がワープした先は焦凍の目の前だ。目を丸くしている焦凍に出久は叫ぶ。

「僕ごと凍らせろっ！ とどろきくん！」

？その声と同時に、氷が展開される。足元から少しずつ凍りついてゆく。コンマ何秒とはいかないものの、数秒も経たないうちにアランブラと出久は氷の彫像へと変わった。

『ガシャット！』

？ガシャコンソードにタドルクエストガシャットが差し込まれる。ガシャコンソードの刀身が氷を纏う。

『キメワザ！』

『タドルクリティカルフィニッシュ！』

？氷像に向けて斬撃が放たれる。アランブラは爆発四散し、消滅していった。そして、ゲームクリア音声が鳴り、ゲームは終了した。

？変身を解除した焦凍は、出久のもとへと向かう。衝撃に巻き込まれた出久は許容量を超えるダメージを受け、強制変身解除されてしまっていた。

「おい、大丈夫か？」

? 焦凍の声に、よろよると立ち上がる出久。白衣もところどころが焦げ、顔や手にも傷を負っている。

「はい……。一回くらいなら必殺技を食らっても大丈夫と分かってたんで……」

「分かっててやったのかよ……。めちやくちやだな」

「自分を犠牲にしても戦うのが、ヒーローだと思っんです。……って、CRに戻らなきゃ! お先、失礼します!」

? 焦凍を残して、出久はCRへとワープしていった。

? 出久が病室に入っていくと、結花がこちらを睨みつけていた。その横で、明日那が不安そうに2人の顔を見ている。

「……治しちゃったんだ」

「やっぱり、結花ちゃんには死んで欲しくない。これはドクターとしてじゃなくても、そう思う」

「じゃあ、わたしはこれからイジメられろって言うの?」

「それなんだけどさ……」

? 出久はベットの上的結花と目線を合わせる為に、少ししやがんだ。そして、一枚の書類を差し出した。それは出久がCRに戻ってから書いた診断書で、病状などが細かく

書かれていた。

「ゲーム病は体にも負担がすごくかかる病気ではある。だけど、バグスターウイルスにはストレスで増殖する性質があるんだ。心の病気が重症化すると死に至ってしまう」

「それが？」 結花は興味がなさそうな顔だ。

「つまり、きみを追い込んだクラスメイトとか、先生とかは君を殺しかけたんだ。だから校長先生とか教育委員会、何だったら弁護士とかに相談すれば、殺人未遂とかに持ち込めるかもしれない」

「サつ、サツジンミスィ〜!？」

？ 先程まで出久の話についていけていなかった明日那が、その単語に目を剥いた。かなり驚いたのだろう。話し方がポツピーピポパポに戻っている。

「いや、これはちよつと大袈裟過ぎたけど……。でもさ、脅かしてイジメをやめさせるくらいにはなると思うんだ」

？ 出久は、結花の方へと向き直った。

「ねえ、結花ちゃん。たぶん、これからもこんなことが起こらないとは限らないと思う。だけど、世界は個性だけで回っていないんだ」そこで一旦、言葉を切る。「例えば、ヒーローは災害などから人々を救うよね。そのあと、助けられた人が立ち直れるかどうかはその人次第だ。もちろんドクターやナースも手助けはするけどね」

「……正直、先生の言ってること、全部は受け止められない」結花は硬い表情のまま言う。「だけど、もうちよつとだけ生きてみる」そう言つて、彼女は少しだけ唇を斜めにした。

？ 医局の方に戻つてくると、焦凍が不機嫌そうな顔で座つていた。出久を見ると、すぐさま彼は口を開いた。

「置いていくつてどうなんだよ」

「ごつ、ごめんなさい……。僕一つのことですぐ頭がいつぱいになってしまつて……。あの、ほんと轟さんには申し訳ないと思うんですけど……」

「名前」

「え……？」

？ 返された言葉の意味が分からず、ぽかんとする出久。焦凍は言葉をもう一度繰り返す。

「名前だよ。さつき、轟くんつて呼んでただろ」

「あつ、つい……」

「次からはそう呼んでくれ。あと、敬語もやめろ。なんか、ムズムズする」

？ どうしてこんな急に態度が軟化したのか、出久にはよく分からなかった。しかし、自分の行動のどこかに、歩み寄つてくれる理由があつたのだろうかということとは分かつ

た。

「……わかった。よろしくね、轟くん」

「あつ、イズク！ ポツピーのことも、ちゃんとポツピーって呼んでよ！ いつも名前呼ばなきやいけない時ゴマカシてるでしょ！」

「そつ、それは……」

「ポツピー！ ほら、呼んでよ！」

？ポツピーポパパに詰め寄られて、目を白黒させる出久。その様子を、焦凍は黙って見つめる。課題は積み重なってはいるけれども、CRは平和だった。



？時は少し遡る。

？幻夢コーポレーションの社長室に、1人の男がやってきていた。

「エグゼイドの変身者が変更とはどういうことだ？」

？男は乱暴に机へ拳を叩きつける。机の上に載せられていた、ゲームキャラのぬいぐるみが床へと落ちる。それを見て、幻夢コーポレーション社長——檀黎斗は不快げに眉を寄せた。しかし、すぐ表情を笑顔に戻す。

「別に君がライダーの資格を失った訳じゃない。エグゼイドに相応しい変身者が見つかっただけで。君は君でびったりなゲームを用意してあるさ」

？そう言つて、黎斗はデスクの引き出しから紺色のガシヤットとゲームドライバーを取り出した。それらは、目の前で黎斗を睨み続ける男に手渡される。

「仮面ライダースナイプ。今日からそれが君の別名だ。……ヒーロー・爆心地」

誰も神を信じやしない

?ゲームには色々な種類がある。例えば、アクションゲームであったり、RPG、音楽ゲームであったりなど様々だ。人々はその中から自分に合うものをプレイして楽しむことが可能だ。

?レースゲームもその一つ。幻夢コーポレーションからもレースゲームはもちろん発売されている。

?爆走バイクは破壊妨害なんでもありの超デングジャラス・ゲーム。そんなゲームから生まれたバクスターもまた、レースを挑んでくる。

?ゲームエリアにはレース場が開かれていた。嬉々としてバイクに跨っているのは爆走バイクのキャラクター——モータスバクスターだ。しかし、対する焦凍は変身もしていなければ、バイクに乗ってもいかなかった。

「……一つ、訊いてもいいか?」

「おう、なんでも聞け!」

「そのバイク、ガソリンで動いてるのか?」

「当たり前だ! エンジン吹かさねえで、何が走り屋だ!」胸を張るモータス。

「そうか。それは良いことを聞いた」焦凍は微笑を浮かべる。「知ってるか？ ガソリンも凍るってことを」

？ 変身前の彼であれば、瞬きも終わらぬうちにガソリンの凝固点である約-95℃まで下げることができる。モータスが異変に気付いた時には、もう遅かった。いくらハンドルを回しても、エンジンはピクリとも動かない。

？ 焦凍はバイクを側面から乱暴に蹴り倒す。車体は倒れて、モータスも転がり落ちる。

「緑谷！ 今だ！」焦凍は叫ぶ。

？ その瞬間、エグゼイドに変身した出久がワープしてきた。近くに隠れて、様子を伺っていたのだ。

？ 彼はモータスの腹を踏みつけ、すぐには起き上がれないようにした。そのまま、ソードモードのガシャコンブレイカーで何度か突き刺す。その度に“HIT!”という文字が現れる。

『キメワザ！』

？ 幾らかダメージを与えたのち、出久はキメワザを発動する。カラフルなエフェクトと共にモータスを切りつけた。オーバーキルな攻撃を受け、バグスターは消滅。それと共にクリア音声がりどりに鳴り響いた。

『ゲームクリア!』



? 無事にモータスバグスターを倒した出久たちは、CRで休息を取っていた。出久や焦凍がテーブルで飲み物を飲む横で、ポッピーポッピーが嬉しそうにくるくると踊る。

「イズクもショウトもすごい! あつという間に倒しちゃった! 私の応援ソングの出番、無かったもん。練習してたのに」

「いや、それはいらねえ」

? 即座に返された轟の言葉に、ポッピーポッピーは「ピヨる……」と言って、うずくまってしまった。余程ショックだったのだろうか。見た目がモノクロに変化している。「でつ、でも! 轟くんのお陰だよ。やつぱり、凍らせるっていうのは汎用性があるね」場を取りなすように、出久が話を繋ぐ。

「いや、緑谷の考えた作戦が上手くいったからだろ。……ちよつと卑怯な気もするけどな」

「患者の命が懸かっている以上、負ける訳にはいかないからね」

? 出久の作戦は、正攻法とは言い難い戦い方ではあった。

? ゲームならズルやチートと言われてもおかしくないし、なんならアカウントをBANされてしまうかもしれない。しかし、いくらゲームに見えても、これは患者のオペである。

「それはそうだ。倒せなきや意味ねえもんな」焦凍が首肯する。

「でも、せっかく現実がゲームになつてののに楽しく遊べないのは残念……。みんなでドレミファビートとかかしてみたいのになあ」ピヨピヨ状態から復活したポッピーピポポが言う。

? ドレミファビートは、ポッピーピポポが生まれる元となった音楽ゲームである。降ってくるノーツを音楽に合わせて叩く、という単純なゲーム。しかし、音ゲーマーの中では割と高難易度の扱いをされている。

? 何故か。それはボタンを押すのに加え、レバーを動かさなければいけないからである。4レーンの位置移動をレバーひとつで行わなければならない。しかも、背景とノーツの色が似ていて分かりにくい。

? これだけならクソゲーと言っても差し支えないが、収録されている曲が良曲なので許されている面がある。文句をつけながらも音ゲーマーは、あまり良くない譜面も一応プレイする。一番大事なのは曲なのである。

「?ポッピーピポパポが一緒にゲームをしたがるように、他のバグスターもプレイヤーと戦いたがっているだけなのかもしれない。それでも、出久は今の戦い方が間違っていないと考えていた。」

「……バグスターを全部倒すことが出来たら、きつと遊べるようになるんじゃないかな。——そういえば、僕、オールマイトのグッズを探しによく古い玩具屋に行くんだけどさ。そこで幻夢のゲームを見つけたから、買ったんだ」

「えっ?!? もしかしてドレミファビート?」すぐさま、ポッピーピポパポが食いつく。「ううん。今日倒したやつของเกม。えつと……爆走バイク。復刻版じゃなくて、初代のやつ。超プレミアでもおかしくないのに、300円で売ってた」

「ラッキーだな。最近、めっちゃくちゃ高騰してるだろ」

「?幻夢コーポレーションが創立されたのは、100年以上も前のことだ。当時はゲーム業界の最先端を走っていた幻夢だったが、時代を経るにつれて勢いは衰えていた。」

「?それが、新社長が就任して「マイティアクションX」という代表作の復刻版が発売された途端、再び表舞台に躍り出た。そのため、二束三文で中古屋に投げ売りされていた過去のゲームたちが、急に脚光を浴び出したのだ。そのため、ネットオークションではゼロが4個も5個も付いたりする。」

「?とはいえ、出久がそれを購入したのは、転売して儲けたいなどという発想ではな

かった。

「うん。ラッキーだよ。それで、また今度持つてくるから遊ぼうよ。CRにガシャット対応のハードあつたっけ?」

「あるよ。クロトがくれたから。やった〜! 私、すっごく楽しみ!」

? ポッピーピポパポの言葉に出てきた人名に、出久は少し引つかかる。

「幻夢の社長さんだよ。一体どんな人なの?」

「そっか、イズクはまだ会ったことなかったよね。でも、大丈夫! 今日CRに来るって言うてたから!」

? 彼女がそう言い終えたとき、タイミングよく螺旋階段から何者かが上がってきた。黒いスーツに身を包んだ背の高いこの男こそ、ポッピーピポパポの言っていた幻夢コーポレーション社長——檀黎斗であつた。

「あつ、クロト!」

「やあ、ポッピー。それに焦凍くん」黎斗は出久の方へ顔を向けた。「そして……。君が緑谷出久くんか」

「はっ、はじめまして。緑谷出久です……」

「……君は水晶のようだな」

? 出久の自己紹介に対しては何も返さないで、黎斗はよく分からないことを話しはじ

めた。

「はあ……？」 流石に出久も戸惑いを隠せない。

「昔の知人にヒーローであろう、聖人であろう、とした男がいた。誰よりも真つ直ぐで、自分を犠牲にしても誰かを救いたいと考えていた」

？ 黎斗はここではない、何処か遠くを見ているようだった。

「君はその男によく似ている……。だからこそ、とても心配だ。君の水晶が砕け散ってしまう日がくるんじゃないかとね」

「……僕の心が折れてしまうってことですか？」

「その可能性もあるというだけだ。でも、君はCRの大事な一員。そうならないよう、ポッピーや私がサポートするさ」

？ 黎斗はそう言つて、ポケットからゲームソフトを取り出した。それをテーブルの上に並べる。赤色のゲームと、オレンジ色のゲームだ。

「ゲキトツロボッツとジエツトコンバツト。これはライダーガシャットではなく、レベルアップ用のガシャットだ。ゲームドライバーに2つ目のスロットがあるだろうか？」

「成る程な。あの時見た、黒いエグゼイドもレベルアップしていたって訳か」 焦凍が身を乗り出し、ガシャットを見ながら言う。

「……ああ。そのことはポッピーから聞いたよ。私にも正体などはよく分からないが、

多分このガシヤットがあれば対抗はできるはずだ」

？ 出久は何とは無しに、赤色のガシヤットを手に取る。貼られたラベルには、赤い口ポットがこちらに手を伸ばしているイラストが描かれていた。

「それじゃあ、私は失礼するよ。スケジュールが立て込んでるのでね」

「あつ、私途中まで見送るよ。えいっ！コスチュウムチェンジ！」

？ くるりとポッピーポパポが一回転すると、光に包まれたあと仮野明日那の姿に変わる。彼女は黎斗と共に廊下へと出て行った。

「……なんか、胡散クセエだろ。アイツ」

？ 明日那達が去った後、焦凍がポツリと本音を漏らした。彼の眉間には皺が寄っており、それが冗談でも何でもないことは容易に見て取れた。

？ 出久は、焦凍の言ったことに同感ではあった。けれど、さつきはじめて会った人の悪口を言える程に豪胆で無かったので、無難な返答でお茶を濁した。

「まあ……。ちよつと、普通の人ではなさそうだよね」

「俺は檀黎斗を信用してねえ。利害の一致で手を組んでるだけでしかない。……緑谷、お前も気をつけた方がいいぞ」

「それがいいかもね。——とところで、轟くんってさ……」

？ 質問は最後まで言えなかった。出久と焦凍のゲームスコープがけたたましく音を

鳴らしたからである。すぐさま彼らは現場へと駆け出す。

「だから、出久はこの後続けようとしていた」どうして、仮面ライダーになろうと思ったの？」という言葉を飲み込むことになってしまったのだった。



「現場に出久達が急行した時には、もうバグスターは暴れていた。しかし、患者から分離した状態であった。現状が把握出来ないが、手をこまねいているわけにはいかない。近辺の慌てふためいている人々にすぐ逃げるように伝え、彼らはそれぞれガシャットを構える。」

「変身！」

「変身！」

『ガシャット！』

『レッツ・ゲーム！メツチャ・ゲーム!?ムツチャ・ゲーム!?ワツチャ・ネーム!』

『アイムア・仮面ライダー!』

「仮面ライダーに変身した彼らが、バグスターを倒そうと走り出した瞬間に背後で大規模な爆発が起こった。何が起こったのか分からず、慌てて後ろを向く。」

「また、ライダーか……!」

?この前の黒いエグゼイドとはまた違う、スナイパーのようなデザインのライダーがそこには立っていた。紺色を基調としたボディに蛍光イエローのラインとローブ。頭部には「STG」と書かれており、右目は前髪らしきパーツで隠れている。手には、ガシヤコンウエポんらしきショットガンが握られていた。

?まだこの時の出久は知らないが、このライダーはシューティングゲームのガシヤットを使用して変身することの出来る、仮面ライダースナイプであった。

?謎のライダー——スナイプは出久や焦凍に銃弾を浴びせかけた。そして、スナイプは出久を狙っていたのか、たたらを踏んでいた彼に近づいてくる。それに気づいた出久は先手必勝と言わんばかりに、スナイプの方へとワープする。

「轟くん! 君はバグスターを!」ワープの寸前、出久はそう叫ぶ。

「任せろ!」出久の言葉を聞き、焦凍はバグスターの方へと駆け出していった。

?瞬間移動した出久は、ドライバーのレバーを引く。パーツが剥がれてゆき、レベルが上がる。

『ガッチャーン!』

『レベルアップ!』

『マイティ・ジャンプ! マイティ・キック! マイティ・マイティ・アクションX!!』

?しかし、出久はそこで終わらなかつた。彼はオペをしにきたのであり、スナイプと戦うのは早く切り上げたかつたからである。

?レベルアップしたと同時にスナイプの顎にキックを入れる。それで少し距離を取ると、先程黎斗から貰ったゲキトツロボツツガシヤットを取り出した。

『ゲキトツロボツツ!』

?出久はガシヤットをスロットに差し込んだ。すると、彼の周りに赤色のロボツトが出現する。

『アゲツチャ!』

『ぶっ飛ばせ! 突撃! ゲキトツパンチ! ゲ・キ・ト・ツ ロボツツ!』

?エグゼイドにロボツトが合体する。頭部はロボツトのような意匠に変化し、胸と肩に取り付けられたアーマーはSFに登場しそうなメタリックレッド。そして、左腕にはロボツトアーマーが装着された。仮面ライダーエグゼイド・ロボツトアクションゲーマーレベル3の完成である。

「悪いけど、君と戦つてる暇は無いんだ!」

?出久はそのまま殴り掛かろうとするが、スナイプの起こす爆破によって阻まれる。爆破を避ける為にワープを繰り返し、有効打を決められぬまま時間だけが過ぎていく。

——……どうする? そもそも、僕の強みって何だ? ワープばかりしてたらラチが

あかないぞ……。何か有効な方法を……

？爆風の中、出久は考える。

——いや、違う！　こんな時こそ正攻法だ！

？出久は辺りを見回し、1つのエナジーアイテムを取った。力瘤を見せつけるようなシルエットが描かれているメダルだ。

『マッスル化！』

？マッスル化には一定時間攻撃力を上昇させる効果がある。一時的に筋肉を増強した出久は、爆発に巻き込まれるのも構わずに突っ込んでいく。自分のライフが削れるのも気にしないで、スナイプにパンチを繰り返す。

「SMASH!!!」

？最後に拳を大きく振り上げた時には、エグゼイドもスナイプもライフ表示の目盛りが残り1つになっていた。

？このまま戦い続ければ、ゲームオーバーになることは避けられない。そのリスクを回避する為、双方とも変身を解除した。出久の目の前には、透き通るように白い肌と白金の髪を持つ男が居た。

？出久はこの男のことをよく知っていた。何故なら彼は——

「——かつちゃん……」

? 幼馴染の、爆豪勝己だったのだから。

BOOM! 2・シューティング(1)

? 変身を解除した勝己は、肩で息をしながら出久を睨め付けていた。出久に彼は何かを言おうとしたようだった。しかし、急に彼の体が前に揺らいだと思えば、そのまま地面に倒れこむ。彼は起き上がるどころか、ピクリとも動かなかった。

「かつちゃん!」

? 出久が慌てて駆け寄る。彼の体にはノイズが走っていた。ゲーム病特有の症状だ。すぐさま、ゲームスコープで彼の体内をスキャンして確認。バンバンシューティングのキャラクターであるリボルバグスターの反応が出た。

? しかし、仮面ライダーに変身していた筈の勝己が、何故バグスターウイルスに感染しているのか。尋ねようにも、勝己は意識を失っておりどうしようもなかった。

「……とりあえず、CRに運ぼう。一度戻って担架を持ってきてくれ」変身を解いた焦凍が言う。

「分かった!」

? 出久の体は粒子化し、すぐに姿を消す。数十秒もすると、出久は担架を持った姿でその場に現れる。彼らは勝己を担架に乗せると、CRへと急ぐ。現場から病院ま

で、そう距離が無かったのは幸いだった。

？勝己を病室に運び込んだあと、出久と焦凍、そして明日那は、医局のテーブルでカンファレンスを行っていた。カンファレンスとはいえ、大袈裟なものではなく、それぞれの持っている情報などを共有する簡素なものであった。

「――仮面ライダーに変身出来る人が、あんなふうなゲーム病になることってあるの？」
出久は明日那に尋ねた。

「そんなの、普通はあり得ないよ。ウイルスへの耐性を持つ人しか、ガシャットもドライブも反応してくれないんだから」

「ウイルスへの耐性って？」

「適合手術を受けた人。出久みたいなのは特殊だけど……」

「なあ、ちょっと思いついたんだが」

？明日那と出久の話に特に口を挟むことなく聞いていた焦凍が、軽く片手を挙げた。

「そもそもライダーの資格者に選抜される時点で、適合手術を受けられる程度のウイルス耐性は必須の筈だ。そのレベルの人間なら手術前でもガシャットは反応するんじゃないか？」

？適合手術は人間の体内に僅かなバグスターウイルスを注入する。人間の免疫力を利用して、体内に抗体を作り上げるのだ。だが、微量とはいえウイルスはウイルス。人

によつてはそれが死に直結する場合もある。なので、先にパッチテストなどで調査をするのだ。

「もし、それが正解だとしたらさ。ゲーム病になつた状態で、出久と戦つて互角だつた訳でしょ？ それつて、めちやくちや強いつてことじゃん!? すつごくやばい！」明日那が自分の頬を両手で挟みながら言う。

「ああ。おまけに恐ろしい程の精神力だ。単に、良い格好しいなだけの可能性もあるけどな」その言葉に対し、焦凍もしみじみと頷いていた。

？その時、螺旋階段からドストスと乱暴な足音が聞こえてきた。3人は揃つて、階段の方を見た。そこには、階段を登る勝己の姿があつた。いつもに増して苛立つているようで、普段ネットニュースなどに掲載されている写真よりも凶悪な顔をしていた。

「ちよつと、患者は安静にしてないとダメでしょ！」

？そんな明日那の声も無視して、そのまま勝己は医局内へと入つてくる。そして、椅子に座つている出久の前に立ち、静かに見下ろした。

「久しぶりだね……。えつと、中学ぶりくらいかな……」

？とりあえず、出久は再会の挨拶を試みた。しかし、それは逆効果だつたようだ。何も言わずに勝己は、出久の胸ぐらを掴んで持ち上げた。

？プロヒーローとドクターでは、鍛え方がまるで違う。出久は勝己の手を引き剥がそ

うと藻掻くが、更に締め上げられていくだけであった。

「……おい、デク。なんでテメエがライダーシステムを使ってる？ ゲーム病のことは極一部の人間しか知らないはずだ。何処から嗅ぎつけてきやがったんだ！」

「嗅ぎつけるって、そんな……。僕がライダーになったのは成り行きで。でも、ヒーローみたいに、誰かの役に立てると思って……」

？ライダーになったんだ、と言おうとしたが、勝己の重たい拳でそれは阻まれた。全く予想していなかったそれを出久は避けきれず、まともに受けてしまう。痛みを顔を押さえて蹲る。

？口の中の何処かが切れて、鉄の味がする。鼻の毛細血管も切れたのだろう。ぼたぼたと鼻孔から血が流れ出し、白い床にコントラストを描く。明日那が小さく悲鳴をあげたのが、出久の耳にも入った。

？勝己はわなわなと震え、激昂していた。

「……何がヒーローだ！ つまり、テメエはヒーローごっこに使えるおもちゃを手にして悦に入ってるだけだろうがよ！」

「そんなこと……！」

「あるに決まってるんだろ」彼は冷たく言い放つ。「研修医の身で首を突っ込んでるのもそうだ。デク、テメエは結局何でもいいんだろ。誰かの為だとか、そんな大義名分を掲げ

られる立場が欲しいだけで」

「?ぐつ、と出久は詰まる。勝己の言ってることは間違いでも何でも無かった。それどころか、的を射てさえいた。」

「?誰かのヒーローでありたいという出久の願ひは、彼を律すると同時に呪いでもあった。年月を経て歪みきつたそれは、自己満足の自己犠牲に形を変えて、彼のアイデンティティとなっている。研修医とCRの二足の草鞋を履くりスクを勘定に入れずライダーになったのは、何も焦凍への売り言葉に買い言葉だけではなかったのだ。」

「?勝己の弾効に、出久は項垂れたままで何も言い返すことができなかった。その様子を見て彼は鼻を鳴らし、出久に背を向けた。」

「どこ行くんだよ」焦凍が勝己の背中に声を掛けた。

「バグスターを倒す。なんか文句あるか?」

「いや、好きにしたらいいと思うが……。1つだけ質問、良いか?」

「?勝己は振り向いて、殺意に満ちているような顔を焦凍に向ける。それを気にすることなく、彼は質問を投げかけた。」

「手術を何で受けていなかったんだ?」

「は、手術? 手術どころか、俺はここ何年も病院なんか行ってねえわ。そんじよそこらのモブと一緒にすんな、クソ野郎」

? 理不尽な暴言を返されても、焦凍は冷静な表情を保ったまま「そうか」とだけ言った。もつとも、勝己はそれを聞か聞かないかといううちに、医局を出て行ってしまったのではあるが。

? テーブルの向こう側では、明日那が出久の鼻にティツシユペーパーを詰めてやってきた。出久はティツシユくらい自分で詰められると主張したのだが、結局明日那に押し切られる形となったのだ。

「ハイ。これで大丈夫! しばらくしたら多分止まるよ」そう言って、彼の鼻をバシッと叩く。

「はひ。あひがほうごさいまふ……」

? 両穴にティツシユを目一杯詰め込まれて、どこか間抜け顔の出久は、鼻を押さえたまま礼を述べる。

「それにしても……。さっきのが、出久を苛めてた人なんですよ? なんかやな感じだよね。眉毛なんかこくんなくくらい釣り上がっちゃって」人差し指で眉尻の辺りを引っ張ってみせる。

「いや……。あれでもいいところはあるんだよ。多分……」

? 最後の方は声が小さくなる。出久もあまり自信が無かったからである。

「そうかなあ？ 私にはあんまりそう思えないけど……」案の定、明日那は出久の言葉をやんわり否定した。「それにしても、どうする？ 一応患者だけど、帰っちゃったし。放っておく？」

？ 割と辛辣な明日那の提案に、出久はかぶりを振る。彼はここで逃げる訳にはいかないう理由があつた。

「……ううん。僕、かっちゃんの所に行くつもり」

「えっ!? 行くの?」

「これで行かなかつたら、僕が今まで生きていた意味が無くなっちゃうんだよ」

？ 勝己はいつだつて出久の全てを否定する。だからこそ、出久は自分自身が揺らがないうように、彼の言うことを絶対に受け入れないのだ。ヒーローになるなど言われれば、ヒーローになる夢をいつまでも捨てない。死ねと言われれば、死なない。勝己の人生は出久の否定にあるし、出久の人生は勝己の否定にある。明確な上下関係に見える彼らの関係は、ただの意地の張り合いでしかない。

「……よく分からないけど、出久は行くんだね」明日那は頷いた後、焦凍の方を向いた。「焦凍はどうする?」

？ 焦凍は返事をしなかった。見ている方が怖くなるような無表情で考え込んでおり、こちらの方に目を向けることもしない。

「……焦凍？」明日那はそつと、彼の顔の前で手を振ってみる。

「あつ、ああ……。何だ？ 悪い、聞いてなかった」

「もう！ バグスター倒しにいくかどうか聞いたの！」明日那は相当立腹のようで、声がポツピーポポパポじてきていた。

「だから、悪かったって。考え事をしてたんだ」

「何か、気になることがあったの？」

？出久の問いに焦凍は少し慌てたように首を振り、「なんでも無い。なんでも無いんだ」と幾度も繰り返した。

？それは己に言い聞かせているかのようでもあった。



？CRを後にした勝己は、肩をいからせながら歩いていった。節々は痛むし、熱を持った身体は石のように重たい。しかし、彼はそれを道行く人々には悟られないようにしていた。

？ヒーローというのはその存在感のみで相手を沈黙させるための、いわゆる抑止力で

あるべきだと勝己は常々考えている。どんな時でも弱みを相手に見せてはならない。現に、今にも倒れこみそうな身体を、その信念だけで引き摺っている。

——テメエは結局何でもいいんだろ

? 先程の幼馴染への言葉に、悪意がひとかけらも入っていないと言えば嘘になる。その事実を無視できるほど彼は愚かでは無かった。

「クソツ……」

? 勝己は出久のことが大嫌いである。

? 昔はそうでもなかったはずなのだ。個性が発現する前、世界が勝己と出久の2人で完結していた頃は。気宇壮大な出久の夢を受け入れることが出来ていたし、彼が自分と並び立てる存在だと疑いもしなかった。

? それがどうだろうか? 現実はいくも残酷であり、出久は“無個性”という空っぽのギフトを受け取ることになる。それなのに、彼は夢を捨てることは無かった。

? その姿は、憐れだった。なんの力も無いのに、お伽話のようなヒーロー像を理想として生き続けている。けれど、力の無いものは、力のあるものの庇護のもと生きるのがまともな生き方だろう。現に、勝己は幼稚園の頃まで出久のことを苛めながらも、ヒーローごっこの仲間に入れてやっていた。

? あの日、森の中で彼は子分たちとヒーローごっこをした。だが、丸太で出来た橋を

渡っている時に足を滑らせて、下の池に落ちてしまったのだ。怪我は無かったし、本当にちよつとしたアクシデントでしかなかった。それなのに久は――

――だいじょうぶ？ たてる？

？その手を勝己に伸ばしたのだ。その瞬間、彼は一つの恐怖に囚われた。

――今、いっちゃんすぐくねえやつに見下されてる！

？出久にしてみれば、純粋な心配でしかなかったのだろう。しかし、勝己の膨れ上がりかけていた自尊心はそうは捉えなかったのだ。

「……嫌なこと思い出させやがって」

？自分の感情に理屈がつけられるような年になっても、勝己は出久のことが嫌いなままだ。夢見がちで、綺麗ごとばかり言つて、身の程知らず。絶対に叶わないであろう夢を追いかける姿を見ると、勝己は腹が立つて仕方が無い。そして、出久もビクビクしてばかりの癖に頑固な所があり、周りの声くらいでは揺るがない。そのことも勝己を苛つかせる要因なのだ。

？ぐらりと勝己の体が揺らぐ。彼は咄嗟に爆破を起こして、バランスを保つ。ふと、自分の手を見るとノイズが走っていた。

「……現れたか」

? 勝己の前には、大量の重火器を身につけた黒いバグスターウイルス——リボルバグスターが右手の万能重火器を突きつけていた。

? バグスターは宿主のストレスで実体化する。出久のことを考えていたのは、間違いでは無かった——勝己はそういう理屈で、自分を安心させた。

? ドライバーを腰に巻く。バンバンシューティングガシヤットも取り出し、起動する。

『バンバンシューティング!』

? ボタンを押した途端、先程よりも更に身体へ痛みが走る。呻き声をあげたくなるのを押し留め、歯を食いしばる。身体の不調など素知らぬふりをする。

「……変身!」

『ガシヤット!』

? 震える手で、何とかガシヤットを握る。それをドライバーに差し込んで、レバーを引く。

『ガツチャーン!』

『レベルアップ!』

『バンバンッ! バンバンッ! バンアーバンアーシューティングウツ!』

? 勝己は仮面ライダースナイプ・レベル2に変身した。仮面の下の表情はもう、本人

以外には分からない。

「ブツ殺すぞ！ オラア!!!」

？彼は両手から爆破を起こし、リボルの方へと跳躍していった。

BOOM! 2・シューティング(2)

？ 出久達は勝己を探すべく、病院の近くを歩き回っていた。ゲーム病に感染していることもあり、そう遠くへは行っていないだろうと彼らは考えていたのだ。しかし、その目算は早々に外れてしまった。病院周辺をいくら探しても、そこに勝己はおらず、ただただ疲労が蓄積されただけであった。

「アイツ、めちやくちや早歩きだな……。よくあの状態で歩いてるもんだ」焦凍は嘆息した。

「まあ、どう見ても丈夫そうだったしね」

「丈夫とかそういうレベルじゃないだろ……」

？ 焦凍とポッピーポッピーは散歩コースに点在しているベンチの1つに腰掛けていた。一応迅速に勝己を探すべき状況なのだが、出久はともかく2人は既にもうやる気が無かった。いくらゲーム病患者とはいえ自分で倒すと云っているし、それが不可能なほど彼が弱いなんてことはない。見つければ重畳、という感覚であった。逆に出久の方がお節介なのである。

「ゲームエリアに移動しているって可能性は無いかな？」

「有り得るな。それなら……」

? 焦凍は立ち上がり、腰にドライバーを巻く。ホルダーのボタンを押して、ゲームエリアを展開する。もしも、ゲームが始まっているのであれば、そのステージに転移されるはずだ。

『ステージセレクト!』

? 一拍おいて、周りの風景は一変した。緑はさつきよりも割合が増え、石畳は小石ばかりの地面に変わる。目の前には川が流れている。溪谷フィールドなのだろう。

「でかした、ポッピーポパポ。見つけたぞ」

「えっ、ホント!? どこどこ?」ポッピーポパポは辺りを見渡す。

「そこだ」

? 焦凍の指差す先では爆破によるものであろうか。土埃が大量に舞っており、戦闘が行われているであろうことは容易に分かった。

「……どうなってるの?」

「とにかく近くで様子を見よう」

? 彼は川を個性で凍らせ、そのまま突っ切る。続こうとしたポッピーポパポは滑って転びそうになり、そのまま尻餅をついた。

「ピヨ……」彼女はもぞもぞと起き上がる。

「おい、大丈夫か？」

「うん……。氷つてつるつるするんだね……。私、知らなかった」

「それは覚えておいた方がいいな。割と氷はつるつるしている」真面目な顔で焦凍はそう返した。

？暫く歩くと、戦闘が行われている場所がはつきり見えてくる。そこでは、リボルバグスターにスナイプ、そしてエグゼイドによる戦いが繰り広げられていた。

？仁王立ちした勝己が爆破を繰り返す中、出久がガシヤコンウエポンでバグスターに攻撃を入れているのが見える。脇からそつと様子を伺っていた彼らだったが、ポツピーピポパポがあることに気づいた。

「バクゴーって人の個性って、爆破なんでしょ？　でも、何でリボルも爆破してるんだろう……？　そんなのバンバンシューティングのキャラ設定に無かったはずなのに……」

？彼女の言う通り、土埃が舞う理由は勝己からだけではなかった。リボルからも爆風が生み出されていたのだ。

「もしかしたら、バグスターには宿主の個性をも乗っ取る特性があるのかもしれない。今まで俺たちに分からなかっただけで。でも、そうなると厄介だな……」

？今までCRに來た患者は、発現前や無個性、それか戦闘向きではない個性であった。故に個性をコピーされていることが分からなかったのだろう、と焦凍は結論付けてい

た。

？実際のところ、彼の推論は正しかった。今までのどのバグスターも患者の意識や身体だけでなく、個性までも奪っていたのだ。そこには、バグスターを撒き散らしている黒幕の”個性を奪う”という思惑を感じ取る事ができた。

「でもさでもさ、なんかリボル強すぎない？ ライダー2人がかりで苦戦するって中々無いよ」

「……いや、よく見てみる。緑谷の攻撃が全く通ってない」

？彼の指摘の通り、出久がリボルに当てている攻撃の判定は全て”MISS”となっていた。

「ホントだ！ 何で!?!」

「緑谷がストレス源だからだ」答えは簡潔だった。「アイツが攻撃すればするほど、爆豪は弱ってバグスターが強化される。多分、立つてるだけでやっとなんだらう。そうじゃなきゃ、爆豪の奴がもつと暴れない訳が無い」

「それって、イズクは全然役に立ってないじゃん……。本人、気づいてないのかな」ポツピーピポパポは首を傾げた。

「気づいてないんだらうな」

？そんな話をしている間に、出久がキメワザを発動してしまう。攻撃が効いていない

以上、それは不発に終わる。

？ 傷一つ無いリボルとは反対に、勝己の容態は悪化していた。彼は呻き声を上げ、身体をくの字に折り曲げた。そして、透明人間の個性のように身体が向こう側の風景を写し始める。消滅が近づいているのだ。

「マズい！」

？ それを見て、焦凍は勝己のもとへ走った。勝己のドライバーのガシヤットを抜き、ゲームエリアから離脱させる。

「轟くん！？」

「緑谷！ お前も離脱しろ！」

？ 急に現れた焦凍の勢いに吞まれ、出久は言われるままにガシヤットを抜いた。『ガツシューーン』という音声と共に、出久の姿が消える。それを確認すると、焦凍は持っていた2つのガシヤットを起動した。

『タドルクエスト！』

『ジェットコンバット！』

？ ブレイブのスーツにアーマーが装着され、腰にはガトリング砲が装備される。

？ 焦凍が早々にレベルアップした理由は幾つかあったが、その一つにこのガシヤットを使用した形態に飛行機能がついていることだった。彼はリボルの爆破可能範囲外か

ら爆撃すべく、飛翔した。



? 一方で、勝己と出久は現実世界へと引き戻されていた。ゲームエリアと現実世界との間に差異は殆ど無い。視覚的情報のみが変化を知らせていた。

「かつちゃん! 大丈夫!」出久は、側で転がっている勝己を揺り起こす。

? 勝己の身体にはノイズが走っていて、ゲーム病の症状が進行していることは容易に見て取れる。それでも、彼の目はしっかりと見開かれており、出久を睨んでいた。

「……ヒーローごっこにかこつけて、俺を殺せて満足か? デク」

? 想定を超えた言葉に思わずたじろぐ。出久にしてみれば、ただ幼馴染を救いたいたいだけだ。それなのに、何故そのようなことを言われているのか。彼には皆目見当がつかなかった。

? そんな出久に勝己は更に言葉を重ねた。

「……やっぱりテメエは人の気持ちなんか、1つも分かってねえんだな。そうじゃないや、平気な顔で俺の前に居られねえよ」

「……なに？ なに、言ってるの……？」

「助けなんか必要ねえって言ってるんだよ！」叫びに呼応するように、勝己の手から爆破が起きる。「俺の人生に……デク、お前は要らねえ！」

？ 勝己は拳を振りかざす。しかし、それは弱々しいものであった。

「……それなら、なんで。……なんで——」出久は彼の手をはたき落とした。

「——君は、助けを求めてる顔をするんだよ!？」

？ そして、自分がされたのと同じように出久は、勝己を殴りつけた。喧嘩慣れしていない人間の殴り方ではあったが、勝己は避けることが出来ずにもろに食らう。

「……クソデクが知った様にほざくな！ 死ねえ！」

？ 負けじと勝己も出久を殴り返し、馬乗りになる。マウントを取った彼は、何発も出久にへと打ち込む。

「かつちゃんだって、僕の気持ちが分かってない癖に！ バカヤロウ！」

？ 普段なら怯えてしまうような状況だが、頭に血が上った出久は痛みや恐怖も薄れていた。故に、彼は勝己に怒鳴り返したどころか、的確に膝で股間を狙う。立場は一転、のたうち回る勝己を出久は容赦なく殴り倒す。

？ 勝己もやられたままで終わる訳はなく、爆破を起こして距離を取った。だが、出久は諦めずに立ち向かってくる。

? 昔ならあり得なかった、泥仕合がそこにはあった。

? 思いがけなく始まってしまった口汚い罵り合いと乱闘は、様子を見にポッピーピポパポがゲームエリアから戻ってくるまで続いていた。



? リボルバグスターを倒し終えた焦凍は変身を解き、ゲームエリアを離脱した。出久やポッピーピポパポを探そうと歩き始めた時、彼はある人物に声を掛けられる。

「やあ、焦凍くん」

「檀黎斗……!」

? スーツ姿の黎斗が、街路樹に凭れてヒラヒラと手を振っていた。その姿を見て、焦凍は端正な顔を歪める。彼に詰め寄り、言葉をまくし立てた。

「何故、爆豪に適合手術のことを教えなかった? お前のことだ、緑谷とのことも分かっていたんだらう。まさか、消滅させるつもりでいたのか?」

? 黎斗はただただ、それを聞いてニヤニヤと笑っていた。

「何がおかしい?」焦凍の声は棘を含んでいた。

「そりゃあ、おかしいさ」黎斗はくつくつと笑う。「私の計画を見て見ぬ振りしている君

が、今更ヒーロー気取りとはね」

「……言いたいことはそれだけか？」

？ 焦凍と黎斗の周りを包む空気が急激に冷え始める。しかし、黎斗は平然な顔をしていた。

「別にここで私を殺すのは君の勝手だ。だが、私が死ねば、消滅した君の母親はずっと戻らないままで」

？ そう告げられた途端、周囲の温度は元へ戻る。けれども、焦凍の顔は真っ青になっていた。

？ 実は、焦凍の母親はゲーム病を患って8年前に消滅していた。母の死以来、焦凍はヒーローへの気力を失ってしまう。父親にも今まで以上に反発し、無我夢中でゲーム病の原因を探っていたときに檀黎斗は接触してきたのであった。

？ 黎斗は、焦凍に自分こそが消滅者を生み出している張本人だと告げた。その上で、母親を蘇らせる手段としてライダーになることを勧めた。これは黎斗の親切心ではなく、CR設立の為にヒーロー事務所の資本を入れたかったからなのである。

？ No. 1ヒーローを擁する事務所が金を出せば、他の事務所もその後が続いてくると彼は踏んでおり、その予想は見事に当たった。

「……」ぎりり、と歯の噛み合う音がする程強く、焦凍は唇を噛む。

「そうなることは私にとっても不本意なことだ。子が母を思う心には、私にも共感すべき部分があるからね」

「見え透いた嘘を吐くんだな。情なんてない癖に」

？ 焦凍は黎斗を睨み、そう吐き捨てる。黎斗に共感されることがあるだなんて、考えるだけでも腹が立った。

「少なくとも。焦凍くん、君よりはあるつもりだ。君がヒーローの卵だったころ、人々を苦しめていた……そう、敵連合だったね。その中心格の男を消滅させたのは何を隠そう、私だ」

「やはり、バグスターに個性を奪う個性を利用していたのか……」

？ 敵連合。それは過去に存在した、現代社会の在り方に異を唱える者たちの集団だった。かつてのN.O. 1ヒーロー・オールマイトを始めとして、数々の人間が彼らを警戒していたが、ある日敵連合は忽然と姿を消してしまった。正確には、彼らの軸である「オール・フォー・ワン」を失った為に、組織は瓦解してしまっただけである。

？ 最初こそ、何か大きな陰謀の序章なのではないか、と噂された。しかし、懸念をよそに人々を脅かすような出来事は1つも起こらなかった。どこか不完全燃焼のまま、巨悪のヴィランの存在は無くなったことになってしまったのである。

？ 黎斗はそれに答えないうまま、自らに酔いしれるかの如く両手を広げた。そして、語

んじるように語り始める。

「人間は進化した結果、”個性”を手に入れた。喜ばしきことだ。だが、人々は己の個性に胡座をかいて、ただ生きているだけ。それではいけない。私は、ただそのことを気づかせたいだけのさ」

「その為なら、人を殺しても構わないと?」

「多少の犠牲は仕方ない。そんな些細な問題の為に、私の神の才能が十全に使われないなんてことはあってはならない」

?何を言っても、黎斗に人の道が通じることは無い。焦凍は煮え繰り返りそうな己の感情に、何とか蓋をする。結局、黎斗に与している焦凍自身も、同じ穴の貉ではあるのだから……。